

# 新刊紹介

## 和の世界観

金子大榮師著作刊行會刊

本書は昭和十六年五月三日・四日の兩日に亘り、華頂會館に於て『金子大榮先生遺曆感謝の會』として開催せられたる『國民精神と日本佛教』講演會に於て、發表せられたる講演速記である。従つて金子師の『和の世界観』を中心に、正親舍英師の挨拶をはじめ、足利淨圓曾我量深兩師の講演をも含めて、此の一部を成してゐる。其中足利淨圓師は法鼓の演題を掲げて金子先生の徳を稱へ、曾我量深師は『和とは他なし感應道交これなり。』と喝破しつつ、其の深い内省を語られてゐる。而して一部の主題として金子師の『和の世界観』は百六十餘頁に亘りて、聖德太子の十七條の憲法に依りつゝ、和の世界の究明に當られてゐる。即ち、和の內容する「一味」「強み」「なごみ」なる三性格を指適し、更に「時代を同じうするものの和」「時代を異にするものの和」

「人間と自然との和」なる三つの和の世界に就いて、興味深く詳述され、後學に裨益する所多大である。好學の士の一讀を勵むる所以である。

### 目次

- 一、開會の辭……………正親舍英
- 一、法 鼓……………足利淨圓
- 一、和の世界観……………金子大榮
- 一、和の世界 二、身に行ふ分、心に修むべき徳 三、佛教の歴史
- 觀 四、自然の淨土
- 一、感應道交……………曾我量深
- 一、閉會の辭……………正親舍英
- (四六版二二二頁 非賣品 横濱市保土ヶ谷區神戸上町二三七金子大榮師著作刊行會發行)―長谷川

## 續眞宗大系

第二十卷 總目錄

眞宗典籍刊行會刊

『續眞宗大系』(二十卷・別卷一冊)は昭和十一年七月第一回配本以來、茲に第二十卷『總目錄』部の刊行に依つて完成したのである。我等は先の『正大系』と相俟つて、愈々其の全きを得た事を欣快と

すると共に、關係者諸氏に對して深く敬意を表するものである。

本書の攝むる所、先づ『續眞宗大系總目錄』を始め、『大谷派學事史』『大谷派學事史略年表』『三講者名譜補遺』『學案講義年鑑補遺』『大谷派先輩著述目錄補遺』等にして、最後は『續眞宗大系刊行の跡を顧みて』の一章を以て結んでゐる。此の中、我等の特に喜びとする所は、『大谷派學事史』『同略年表』及び『大谷派先輩著述目錄補遺』の三部を得た事である。前二者は桑谷觀宇教授の勞作に安井先生の補修せられたものであり、後者は武田統一氏の編纂にかかるとして、共に其の勞を多とする。殊に三百頁に亘る前二者の收録は眞に本書に於ける歴卷として、緡くもの何人も等しく喜びとする所であらう。從來我が大谷派に於ける學事史の研究は、極めて寥々たるもので、我等はかかる研究の發表を待望する事、久しいものがあつたのであるが、今此の二部を得此れによつて益さるる所多き事を感謝しなければならぬ。唯、憾むらくは、單行本に非ざる關係上、取り扱

ひに至極不便を感じる點が遺憾で、此れは將來、獨立單行本として、世に送られん事を希望して止まぬ次第である。

ともあれ、茲に此の多難なる時代に於て、恙なく『續大系』の完成を得た事は當事者と共に我等も亦心安けさを感じるものである。

因みに、此の『總目錄』部の一冊は日本標準規格A5型として、從來のものとは丈をいさゝか縮少し、表紙亦異質なれど、先の天金の廢止と共に此れも亦許さるべきものであらう。

(A5四四〇頁 東京市本郷區駒込動坂町三六〇 眞宗典籍刊行會發行) — 長谷川

## 教行信證の哲學

武内義範著

『教行信證』一部六軸の結構が、特殊なる組織體系を以て、眞實開顯の任務に直參する事は、既に稀有なる宗教哲學書として、吾人の感銘おく能はぬ所であるが本書は其の『教行信證』に對する哲學的解明を意圖し、其の方途を次の如く序し

てゐる。『教行信證』の哲學は、單に從來の眞宗學の深化發展の意義を有するばかりではない。其れはまた日本(絶對)精神史の一の最高峯であるこの教行信證を、東西兩思想の綜合を意圖する日本哲學の現段階から、その重大なる使命と固く結びつけられた仕方、解明して行くことを意味する。即ち、茲に本書が『教行信證の哲學』と題さるる所以がある。然し其れは巻頭題下に「方便化身土卷の研究」と註記さるるが如く、著者の努力は本書に於ては、全課題としての『教行信證』の哲學的解明に對する「最初の手懸りとなる」最後の『化卷』の組織構造の解明に注がれてゐる。従つて著者は、正像末の史觀と三願轉入との關係を問題とし、「三願轉入は、正像末の歴史の世界に於て、現(存)在が、自己の中にこの歴史を繰り返し想起し内化するところに成立する。」と強調しつつ、第十九二十兩願の解明に當つてゐる。

左の目次によつて其の概要を知られた

い。一、教行信證への通路 1 教行信證に

於ける方便化身土卷の位置、2 方便化身土卷成立の由來、3 正像末の史觀と三願轉入との關係

二、三願轉入の問題 1 從來の解釋、2 その難點

三、第十九願の解明 1 臨終現前の願

2 顯彰隱密の義、3 三心釋の顯彰隱密

四、第二十願の解明 1 罪障の自覺、

2 念佛申さんと思ひ立つ心、3 信不具足(第十八願への轉入)

因みに、本書は『教養文庫』の一部として刊行されしものたる事を附言する。

(新四六判、一八三頁、定價五拾錢、東京神田駿河台弘文堂書房發行) — 長谷川

## 印度佛教の話 (佛敎知識講座) (第四輯)

龍山章眞著

本書は佛敎の大衆化を意圖する「佛敎知識講座」の一編として一般的には興味少なき特殊な問題を成るべく避けると共に誰人にも理解し易き用語を以て佛敎に關するあらゆる事柄を平明に敘述するも

のである。本書の組織の大綱は第一篇印度佛教の周邊、第二篇印度佛教の内相、第三篇印度佛教の外相、第四篇印度佛教の現状の四篇より成つてゐる。以下概略各篇の内容を紹介すれば次の如くである。

第一篇は日本及び外國に於ける近代の印度佛教研究の方法なり成果なりを取り纏めて示すと共に佛教の性格をば佛教がそこに生れ、そこに滅びた印度の民族的性格との關聯に於て究明し、外括的に先づ印度佛教入門の第一步を示さんとするものである。第二篇は先づ釋尊の性格と説法とを一瞥し、その後の教團の變遷より大乘興起の教學的事情を述べ、大乘經典の教理及び風格を説いて、終りに龍樹世親及び其れ以後佛教滅亡に至るまでの教學の概説をする、所謂全佛教々學史を分り易く簡略に説くものである。第三篇は阿育王等の佛教保護の四王を素描し、更に建築、彫刻、繪畫の三方面より佛教美術を解説し、更に又王舍城等の佛教遺跡を述べて佛教の政治或は文化面を眺めるものである。第四篇は印度、ビルマ、

タイ、ネパール等の所謂印度文化圏に於ける佛教の現状を述ぶるものである。

本書は以上の如き四篇より成るが、就中第二篇の大乘經典を述ぶる場所に於て、大乘經典を以て象徴的譬喩的・否定的・矛盾的・感覺的・聲音的等の特殊な表現形式を以て説かれてゐる所の宗教的思索と體驗との融合した渾然たる藝術品と見做し、若しかゝる藝術品をば抽象的概念的に理解するならばそれは枯燥せる形骸を捕へてその生きた具體的生命を失ふものであつて、吾々は經典のかゝる藝術味豊かな特殊な表現の裡に打出さるる眞生命に直接純粹に觸れなければならぬ意味を力説し、華嚴・維摩等の諸經典を此等種々の特殊な表現形式を通して巧みな麗筆を以て率直に其の眞髓に味到してをられる如きは本書中正に白眉と言ふべきであらう。教授のかゝる豊かにも優れた見方の下に各經典は生々とした姿を以て吾々に迫り來るものとなり、吾々は其等經典の上に在來の専門學的臭味を脱した極めてリアルな情感を感じるであらう。ともすれば一般的に興味薄きものと

なりがちな經典を宗教味溢るる生彩なるものに取り扱はれる處教授の豊富な詞藻を覺えしめられる。尙第三篇は印度佛教美術に對する一般的教養を得しむるものとして印度佛教入門の者に大いに喜ばれるであらうし、又最後の印度佛教の現状の一篇は南方佛教への關心の高まりつゝある今日大いに注目すべき讀物であらう。以上が本書の概略の紹介であるが、とまれ本書は印度佛教を極めて適切なる諸角度より總合的に手際よく敘述せるものであり、印度佛教の大概を廣き視野より要領よく知るに好個の著作であらう。

(昭十七、一、大谷出版協會、六拾錢)

—安井—

### 河南 洛陽 龍門石窟の研究

水野清一 共著  
長廣敏雄

佛教は支那に入つて教理の上に撩亂の花を開いた事は言ふまでもないが、同時に實際に民族精神に浸潤した結果として幾多の石窟石經寺塔佛像等の遺物を殘してゐる。これらの遺物は當時の社會の實情を反映してゐるのみならず、その中に

は典籍の上では既に失はれ或ひは過まられて、これによらなくては真相を知り得ないものも含まれてゐるのであつて、支那文化史支那佛教史の研究には典籍の研究と相俟つてこれが研究は一日もゆるがせに出来ない所である。然るに現今支那の國情等の事情によつてこれら遺物の基礎的な實地調査が行届かず、圖譜拓影等の不備もあつて先人の辛苦にも拘らず此の方面の研究は未だ手を染めたばかりになつてゐる様な有様である。龍門の石窟は雲岡の石窟と共にこれら遺物中の雙壁であつて、洛陽の南伊水の斷崖が一大石

門の狀をなす所に、北魏の此處に都してより唐の開元天寶に至る約二百五十年間に無慮數萬の石窟が開鑿せられたものである。その一々は佛教受容の態相を生々と示して居らぬものはない。此の石窟の藝術的價值は夙に認められてゐたがそれは文人の愛好に偏する觀があり、歐米にあつてはシヤヴァンヌの著書が權威とせられ我國にては大村常盤關野氏等の研究もあつたが、今茲にさきに「響堂山石窟」を公にせられた水野・長廣兩氏によつて、

實地調査にもとづく精細な研究が發表せられるに至つた事は深く慶びとする所である。

此の「龍門石窟の研究」は兩氏が昭和十一年四月多くの艱難にうち克つてなされた實地調査にもとづき、その後今日に至るまでの研鑽をへて出來上つたものであつて、及ぶ限りの資料を檢到し現在最高の研究を網羅して茲に初めて龍門の全貌を明らかにされたものである。その成果は誠に廣く世界に誇るに足るものであつて、今邊に一見して之を論ずる事は出來ないが内容の概要を紹介しよう。

目次。序説。第一編西山石窟各説。第二編東山石窟各説。第三編龍門石窟總論。附録第一龍門石窟に現れる北魏佛教。附録第二龍門石刻錄。本文挿圖一一八。圖版一〇三頁。拓影二八頁五三圖。

第一第二編は兩氏の石窟各室に實施された考古學的調査の記録であるが、實際に現地調査に行はれたのは四月二十四日より二十九日に至る僅か六日間であつて、兩氏も日の足らざりし事を託こち後日に俟つものあることを言つて居られる

が、研究の結果は先人の研究を悉く對照し實測圖拓影寫眞を交へ能ふ限り詳密なものとなつてゐる。此の中特に精細な調査の行はれてゐるのは西山の第三、十三、十四、十七、二十、二十一の諸窟であつて、北魏窟の調査に主力を注がれた様に思はれる。なほ先人の殘した諸研究は序説の中に擧げられてゐる。第三編總論は石窟の開創から歴史の經過に伴ふ造營の變遷の考定、石窟・龕及びその構成要素・天井床その他文様・佛制人物姿態等について様式手法の時代的特徴や變遷を概括してゐる。然し此の石窟が印度西域から支那日本に及ぶ諸遺物の系列の中へ如何なる地位を占めるかといふ様な事は茲に具體的にまとめられてゐない。結論として龍門の北魏窟は漢文化が率直に佛教を取り入れた時代を過ぎて、佛教をよく消化してその傳統の文化が擡頭して來た時代の所産であり、人間の自然のまゝを刻むよりは抽象化された崇高な佛像を禮拜の對象とするに至つてゐる。更に唐代になると伽藍の建立といふ分野が開けて、裝飾的な石窟は輕視せられるに至り、

専ら佛像を中心とする時代となつたと論ぜられてゐる。

附録第一は塚本善隆氏の勞作であつて、前兩氏の考古學的研究と表裏して北魏の佛教を多方面より考察してその性格を明らかにせられたもので、佛教史の研究として最も合理的な方法を盡されたものである。目次の大要は、序説。第一章雲岡龍門石窟の重要性。第二章龍門石刻記の重要性。第三章龍門造像の盛衰と尊像の變化。本論。第四章北魏洛陽佛教の盛衰と龍門。第五章北魏窟に現れたる佛教。第六章佛教史料としての世界造像記。第七章龍門造像に見る禮拜對象の變化。結語。第八章龍門北魏佛教の歴史的性格。なほ此の論文は附録第二と密な關係をもち一半には龍門石刻録を解説する使命を有し、特に第六章には當時の實際の佛教信仰者であつた王室貴族の造像記、これを指導した僧尼の造像記、社會的に活動した義邑の造像記について詳細な研究がなされてゐる。

附録第二は黒川氏寄贈の龍門全拓と稱せられる拓本にもとづくもので、塚本水

野春日氏の手に成り、目錄・異字表を附してあるすべて千四十七種、闕百益の二千二百種といふのに比すれば數は少いが、現在見得るもの重要なものは盡く收められてゐるであらう。

圖版は皆今回の調査に撮影したもので、優秀な製版は遠い北魏の藝術を机上に蘇がへらせて呉れる。これらの寫眞は先人の残した圖譜と共に、支那の遺物が一日も舊態を存續する事を許されない。事情の今日、夫々貴重な記録となり研究の輝かしい記念物として残るであらう。拓影のうち文様のものは今度の製作により、文字のものは黒川氏のものによるといふ。

なほ卷末に英文の圖版目錄・本文の綱要が附せられてゐる。(東方文化研究所研究報告第十六冊 昭和十六年八月 座右寶刊行會刊 四六四倍大 本文四八二頁 四拾圓)(木村)

## 長安の春

石田幹之助著

唐の文化の特色の一はその世界的な性

格にある。未曾有の富と版圖を有し永年の平和の榮えた唐の都長安には、日本百濟高句麗の僧侶學生を初め、突厥回鶻奚契丹高昌焉耆龜茲疏勒干闥吐蕃粟特波斯亞刺比亞敍利亞印度緬甸馬來印度支那南海諸國等全東洋の使節僧侶商人が集つた。世界の首都長安は如何なる面貌をそなへてゐたであらうか。

五陵年少金市東 銀鞍白馬渡春風 落花踏盡何處遊 笑入胡姬酒肆中 特に唐の文化を彩り長安の風俗を風靡したものは西胡と呼ばれる西亞細亞の文化であつた。それは言語衣服食物音樂繪畫彫建築工藝宗教あらゆる方面に影響を及ぼし後世にも強い力を有してゐる。本書は風に西方の文化を研究せられる石田幹之助氏の深い蘊蓄の中より生れたもので、その據る所は大平廣記全唐詩等であるが、文學の上に現れた西胡の活動が集められ、當壇の胡姬、長安盛夏小景、胡人採寶譚など有りし日の長安の面影を摹擬たらしめてゐる。歴史研究としては全くくつろいだものであり讀物としての興趣も豊かに盛られてゐて、或ひは學問的の書

物と目せられぬかも知れぬ。然しその態度はあくまで嚴正であつて世に流行する類書とはやや趣を異にする。一書を机邊にそなへて勉學の折々に遠く盛唐の古を偲びその文化に憧憬しその正しい認識に資するには絶好の書物であらう。かゝる廣い知識にもとづく総合的な理解が東洋史の研究に恒に要求せられてゐることは學徒の忘るべからざるところである。

(昭和十六年四月創元社發行A5二二三頁二圖三十錢)(木村)

## 安南通史

岩村成允著

本書は岩村成允氏が七ヶ年の歲月を費して安南の正史である大越史記全書欽定越史通鑑綱目欽定大南憲錄等にもとづきその他の資料を參考して完成せられたものである。

安南は我等と同じ東亞に國を成す友邦の一であり、十七世紀の頃我國人の活動も頗る活潑であつたにも拘らず、我國人の安南の歴史を研究したものは寔に少なく、まとまつた書物としては古く寛永の

頃安藤守重の安南紀略藹や外蕃通書があり、明治になつて引田利章の安南史がある位のものである。本書はここにはじめてもたらされた正確な史料にする信憑すべき歴史であると言ひ得るであらう。

内容は西紀前二千八百八十年の傳説的な鴻彬期より現代にまで及び、之を忠實に正史の體裁に従つて編年體に敘述せられたものである。記述の正確を期する一方正史の體裁を損はざる事に細心の注意が拂はれて居り、正史に見えざる日本支那との關係の如きを補ふ場合には補註として之を加へる事としてゐる。また特に近世に入つて安南に於ける佛國の勢力が強大となつてからは安南の國辱となる如き事實や佛國に對して憚る所ある事實が多くなつて殆んど正史のみに頼る事は出来ないものであるが、これもそのまま正史の記載により、別に附録に近世史外篇として國外の資料によつて國際關係史が編まれてゐる。

本書は五百頁に及ぶ大冊であるが、正史の體裁を守るの餘り記事は一々の皇帝について嚴密に年月の順を追ひ、殆んど

詳密な年表の如き觀さへある。此のことは一面本書の短所であつて、事件の生長發展を直ちに體系的に把へる事は難かしい。蓋し編年體の歴史として止むを得ざる所である。また史料の關係からであらうが記事があつたらしい政治的變遷に終始してゐて、その間に發達したであらう所の文化的なものは餘り現れてゐない。例へば佛教の如き安南は現今も有數の佛教國であるが、本書には李朝の惠宗皇帝が出家して大内眞教禪寺に居た事や陳朝の太宗が銅鐘を鑄聖宗が普明寺を建て英宗が釋教を頒布し明宗が金剛經を試み仁宗が身を捨てて安子山に居り僧玄光が法螺と佛經を講じた事が見えてゐるのみである。

思ふに本書は未開拓の安南史の分野に一寸ぢの太い縦糸を下されたものであつて、今後は此の縦糸をめぐつて各方面から縦糸に研究の經緯がめぐらされ強靱な安南史の體系が組織せらるべきであらう。

未開拓のところに基礎的な根を下ろされた努力には全く敬意を表するものであ

る。本書を読んで感ずる事は安南は古來印度支那半島の中で最も威を振つた國であるとは言へ内には弑虐篡奪の慘事が多く或ひは支那に屬し或ひは二三代の短い王朝の交迭が續いて遂に完全な佛國の植民地となつて自から立つ能はざる如き状態に至つた。これを救ふものは外部からの正しき誘掖と安南民族自からの覺醒とである。而もこれが完遂は日本の力に俟つての外はない。日本が亞細亞の指導者なるべき事は何人も信じて疑はない所である。また國家の總力をあげて着々達成に邁進しつある所である。然し翻つて思ふに一方南方に赫々たる戦果をあげつつある秋に當つて、一方我國の文化をそこに及ぼすべき充分な用意が出来てゐるであらうか。言ふまでもなく専門家にあつては充分の研究がとげられてゐてそれ故に今日の成果を收め得たもので、あらうが、國民總體としての認識は如何であらうか。近時目覺ましい皇軍の活動に伴つて國民の關心が南方に高まり、世にこれに關する群書の流行を見るが、大方は南

方事情の紹介や經濟調査の報告に止るものが多い。而も少しく研究的なものになると殆んど歐米人によつてなされたものの翻譯である。東洋研究に絶好の立場にあり又重大な使命を負ひながら今になつて翻譯の域を脱しないのは正しく立廻れの觀があるものではないか。建設は永遠であり、研究は不斷に行はねばならぬ。昨今諸方に南方文化研究の會が興されるのを聞くが、一日も早く本書の如き眞摯な學問的良書の多く世に出づる事を衷心より望むものである。(昭和十六年八月富山房發行A5四九四頁七圓)

(木村)

## 研究室彙報

### 眞宗學研究室

○新入會員歡迎會 五月四日午後四時  
於黎明會館樓上、出席者關根學長、金子、安井、加藤、稻葉、日野、桑谷、松原等の諸教授以下學生三十名參加、研究室より禿教授、雨森、長谷川出席

司會、盛會裡に今年度の希望を語り合ふ。

### ○第一會例會

一、五月二十八日午後三時 於第一教室 講師 金子教授の『解學と行學』を聞く。出席者、稻葉、山田契、正木、桑谷、松原の諸教授、自見河野長尾本田等の諸幹事以下三十餘名、研究室より禿教授、雨森、長谷川出席司會。

### ○史蹟見學旅行

一、六月六日、七日(五日午後十一時 京都驛集合)

一、越前眞宗四ヶ本山、永平寺、吉崎別院等見學(福井別院にて一泊)

一、參加者、曾我、禿兩教授引率、長谷川副手以下學生二十五名、日野教授特別參加、極めて愉快な踏査を終る。

### 佛教學研究室

昭和十七年度印度佛教學學界  
新任教授及び新入生歡迎會  
日時 五月十三日午後五時ヨリ  
場所 河原町丸田町角 東洋亭